

宗長連歌資料二種

岩 下 紀 之

ここに架蔵の宗長出座連歌資料を紹介したい。以下の考証には、重松裕巳氏による古典文庫の宗長の諸連歌集、島津忠夫氏による岩波文庫本「宗長日記」、鶴崎裕雄氏による「宗長年譜稿」(帝塚山学院短期大学研究年表所収)を参照している。

1

まず連歌懐紙切。寸法はたて一六・七^ち、よこ十二・八^ち。用紙は斐紙で紺の雲形模様があり、さらに金色の植物の模様を描いている。記されているのは宗長以下四名の句である。裏面の四辺に接着されていた痕跡があり、かつて手鑑に貼られていたのであろう。また裏面に直に「月村齋宗碩」と記され、「月村齋宗碩連歌宗匠たれとなく」と書かれた極書が貼付されている。極書の表裏両面には印章が押されており、印文はかなり不明瞭で判別に苦しむが、朝倉茂入道順のものと思われる。

この切は連歌懐紙の通常の書式で、筆者が宗碩かどうかは別として、室町時代の遺品と見て誤まるまい。

以下現行の通用の文字で翻字してみる。なお図版一を参照されたい。

たれとなくなかむる

秋の袖みえて 宗長

かりのこすらし

お花一むら 長信

野をとをみくるれは

すき風の音 経国

しのふやみちの

たよりともなる 充秀

資料としては右の四句八行にすぎないが、細かいことながら考証を試る。この宗長の句は北野天満宮本『那智籠』に採られている。古典文庫本によって示すと、

六〇六 たのむも里やきりのうちなる

六〇七 誰となく詠る秋のそでみえて

というのであって、この六〇六の句から連続した五句が復原できたことになる。また『那智籠』のこの箇所は永正十二年の句を集めており、宗長はこの年、駿河を立ち、甲斐から信濃へ出、美濃、近江、越前、若狭を経て上洛している。こうして、この連歌切の元の百韻は、興行の年と、場所が、ある程度明らかになった。連衆の長信、経国、充秀は、『連歌総目録』にも、『宗長年譜稿』にも見えず未詳とするほかないが、いずれ宗長の旅先での会に同座した好士たちな

次に「何人百韻」を紹介する。本書はたて二十四・五^七、よこ十七・五^七、袋とじの冊子本で江戸後期の写。やや灰色を帯びた紺色の表紙は後の補修で、左側上部に何も書かれていない題簽が貼つてある。本文六丁、一面九行で百韻が完備している。虫損はあるものの、裏打による修理がほどこされ、ほぼ解説に支障ない。以下本文を記すが、懐紙の変わり目を「三」「四ヲモテ」「四ウラ」と三箇所注記してあるので、その他の変わり目は筆者の注記として、(一ウラ)(二オモテ)のようにかっこに入れて示す。また改面を「で、改丁を」で注記した。なお図版二一1～13を参照されたい。

何人

さそはれは都の富士の秋の雪 ぶき 宗長

きり渡る夜の明ほの、空 宗伯

あさかほにまかきの月もうつろひて周桂

すへ葉わかれぬ軒のくれ竹 宗春

ぬるとりの霜におとする夕間くれ 珠易

さえ行なかれいかにこは覽 長

冬されは風のみこゆる山河に 伯

ふむ跡のこる谷のしははし 桂

何人

ヤシ

まきしきい 都の百六の枝の雷

家

より海を来り 明かたき 空

宗伯

あさひのまきしきい 都の百六の枝の雷

田桂

と葉をまきしきい 都の百六の枝の雷

宗善

あさひのまきしきい 都の百六の枝の雷

瑞易

まきしきい 都の百六の枝の雷

長

冬まきしきい 都の百六の枝の雷

伯

あさひのまきしきい 都の百六の枝の雷

桂

図版 二-1

(ニウラ)

花のかけ爪木もはらふ雪に似て

長

おりてさくらにかへるさとひと

易

かり衣春や程なくくれぬらん

春

き、す鳴野の夜こそふかけれ

伯

ほろくとあめふり出る草まくら

桂

さむる露けき夢の月かけ

長

あはれ世にあらましかはの秋を経て

易

ふるえにさける庭のむら萩

春

いかて人ちきりしころを忘るらん

桂

あたなりと見はうちもたのまし

伯

ことのはにかくる、ものはこゝろにて

長

皆おもふことたれかしられむ

易

身のならんゆくゑこしかたさまくくに

桂

老木にのこる枝のさひしさ

長

(ニオモテ)

きえわたる苔のみとりの春の雪

伯

岩の雫もかすむやまみち

春

百ちとりさえつる朝日ほのかにて

易

よるはすからの風のおちこち

桂

あかしかたいく留り舟わかる覧

海士ならぬたれ磯はおとする

ひく琴のよるへとなすもはかなくて

月にたつぬるよもきふのくれ

ころもうつ宿りや秋のかとならん

しくれて空の秋さむきころ

ね覚をもわひつゝのちはまどろまで

とりのこゑしもあかつきの友

かつこえて相坂のせきのふかき夜に

いつ帰り来んなこりこそあれ

月に日にまち見んまでの我おもひ

花さく春をちきりをく中

匂ひぬとうへし梅をやつけぬらん

かきねをうとむ野辺のうくひす

かりそめのすさひにすめる草の庵

すゝしくもあるか山の下水

夏は皆つちさへさくる日ころ経て

夕露のほるやまとなてしこ

(ニウラ)

長 伯 桂 易 長 伯 桂 長 桂 伯 長 易 桂 伯 長 伯

一いつゆりまんきりくさつおま
 月日中しゆをまそつ親家
 死きくまんとおだりき中
 自いわくうく新まははまおん伯
 子新ひくうしお色ううひと長
 可りせられまひくううまおまお尾
 ちしおまおまおのうく下う易
 夏おひくうらまひくうま目うう種て長
 火あううおまひくうまうう二伯

図版 二-5

虫のねもみたれてひとつ村薄

野わけたつ夜そ風は身にしむ

月しろきねやの板間もすゝろにて

おもふむかしの涙おちつゝ

見しはたれ夢ならぬよにのこるらん

あはれの人の筆の行ゑや

なにはつをふかきこゝろのしるへにて

雪のあしへにおつるかりかね

さえし夜の塩干にけらし朝ほらけ

袖うちつらね旅や忘るゝ

ふるさとにのこるひとりをおもひやれ

なかむる月ははすての山

空にふく風の気色の秋ふけて

木の葉かつ散露の下かけ

むら雨にぬれてたゝすむ鹿のこゑ

なへて夕や物うかるとき

たのみこしよし野のおくも住かたみ

おもひわつらふ世の中のみち

春

長

桂

易

伯

長

桂

易

長

桂

伯

長

易

春

長

桂

伯

長

雲の影をたぐひて雲の村を
かきけりけり春は同くあししと
月よりあけやけの柳をさすりて桂
野よりじりて春は海からつた
名はたかき道なきよふにさるん
わささる人よふ年よりあや
さふらふと柳を記さるる春を
雲の影をたぐひて雲の村を
かきけりけり春は同くあししと

(三ウラ)

春秋のなさけにこゝろあくからし
草木もさそふ恋のはかなさ

ひとつ二葉わかれぬはかり下萌て

ねてのあしたの霜そかすめる

のとかなる汀にあさる田鶴の声

はるけき物はちよの行すへ

おいそめし竹いくむらのかけなれや

ふしみの月の有明のころ

枕かるさとにやのこる秋の夢

とくおき出る道の辺の露

帰るさはしほらん君か袖もおし

とひゆかましをなに、まちけん

こぬくれのうちうたかひもうらみにて

つねにこゝろのまことある人

ちる花ののちもわすれぬをとつれに

こてふやそのゝなこりなる覧

春の雨のふりにし宿はものさひし

軒の雫そくちてひまなき

四オモテ

易 伯 長

長

桂

易

長

伯

春

長

易

桂

伯

長

桂

易

春

伯

長

此は秋の風をけしむる所なり
 昔もとては人々の心もさ
 りしつゝ今もさうあるをり下りて
 終つての所なりたつておそくとも
 今もあつてはわが思ふ所の如く
 今も言はれぬはこれに人長
 思ふ所の如くはこれに人長
 柳は月夜の如く思ふ所の如く
 松は風をけしむる所の如く

図版 二-9

見るまゝにこゝろと、まる山さくら 伯
ななき日くらすかねそしつけき 春

宗長廿八

宗伯廿

周桂廿二

宗春十一

珠易十九

今度自京都得三人柴屋同行有於駿府一会

興行有古今珍敷事皆人申めり為稽古書云々

大永四 九月吉日】

本文は右の通りであるが、末尾に記された大永四年の宗長の行動は「宗長手記」につまびらかで、正月には薪酬恩庵にあり、その後京に滞在、三月十七日より宗碩の庵で「伊庭千句」に出座。四月に京を立つて駿河へ向い、近江、伊勢、尾張、三河、遠江を経て、六月十六日に駿河着。今川氏親治療のため清宮内卿法印を同道しての旅であった。この百韻の発句は次のように記されている。

天... 伯

宗長廿八

宗伯廿

田植廿三

宗善廿一
宗易廿九

今方... 具約...

大... 中...

図版 二-13

府中にかへりて、京より同道の人、ために興行。

誘はれば都のふじのあきのゆき

心は、此さそはるゝものならば、都の不尽の秋の雪ならんとはかりなり。

この記事の前後は「八朔の翌日」と「八月中旬ごろ」であるから、この句は八月中の作ということになる。一方同じ時期の句を集めた「老耳」には

一〇〇五月雨にますげの水の末葉哉

京の人のために駿河にして

一〇一さそはれば都の富士か秋の雪

宗祇年忌

一〇二思出るそでや関もる月となみ

と見えていて、宗祇年忌は七月廿九日と思われるので、「さそはれば」の句は七月中の作ということになる。いずれにしても、この「何人百韻」末尾の日付は、連歌興行の日付ではなく、書写の日時を示すのであろう。

この百韻の付句も「老耳」に採録されているので、以下に指摘しておく。

一オモテ五、六が、

一九三〇 ぬる鳥の霜に音する夕ま暮

一九三一 さえ行ながれいかにこほらん

一ウラ十、十一が

一二七二 あだなりと身はうちもたのまじ

一二七三 ことのはにかくる、物は心にて

二ウラ六、七が

一八七二 涼しくもあるか山の下水

一八七三 夏は皆つちさへさくる日比へて

二ウラ十三、十四は

一二八〇 見しはたゞ夢ならぬ世にのこるらん

一二八一 哀の人のふでの行末や

三オモテ五、六は

一九〇二 古さとに残るひとりを思やれ

一九〇三 なかむる月はをばすての山

と、以上の五句が「老耳」に採り入れられている。百韻の句が「老耳」の各所に散在しているのであるが、この件についてはかつて論じたことがある。「那智籠」「老耳」の二集は、付句の部に部類がなされず、百韻興行の際の自句を順次書き付けたように見えるが、例えばこの大永四年の句群について「伊庭千句」の各句の配置を調べた結果、四季・恋・旅などの小さな句群を見出すことができ、現状はさらに錯簡が生じていると思われる。ここで一八七三の句が夏、一九〇三が秋、一九三一が冬であるのは、それぞれその所を得ているのである。

なお、三ウラ六句目、

ふしみの月の有明のころ

春

については、天満宮文庫本「壁草」に

五四一 えぞしらぬ又やこざらん新枕

五四二 ふしみの月のあり明のころ

とあって同一である。連歌師は日常的に会席に臨み、かなりの速度で吟詠するが、連歌に用いられる語彙は古典的な、類型的なものであり、その結果生みだされる作品が類句や同一の句になるのもしかたないことであつたのだろう。

この百韻の連衆について、まず周桂はこの当時名の通つた連歌師であり、この年の行動は三条西実隆の記録があり、すでに木藤才藏氏「連歌史論考」下にまとめられている。すなわち「実隆公記」大永四年六月一日条に、

周桂・宗珀明日下向駿州、扇下品物共遣之

と見え、「再昌章」の同二日条には

六月二日、周桂法師、富士見にくたり侍しに、戲言に

かへりこん日をは勘定せらるへし結計なしなる道にあらねは

同宗珀につかはし侍し

ふしのねはさもこそあらめわするなよわけし高野の雲風の空

とあり、彼らの親しい交流がうかがわれる。周桂については「連歌史論考」にゆずり、他の三名を追つて見よう。

この百韻の宗伯は実隆の記述の宗珀と同一人物であろうし、同時代人の実隆の書き留めた「宗珀」の方が正しいのであろう。しかし「連歌総目録」には大永三年九月二十一日の何路百韻に宗碩と同座している宗伯があり、一方永正十二年十一月十日の何路百韻、永正十八年五月七日の山何百韻、大永三年正月九日の何船百韻、天文十年十一月二十五日の何路百韻には宗珀が出席している。なおこの最後の百韻は宗長の発句での興行であるが、この句は「老耳」八一に「夜るは時雨朝戸は霜の板屋哉」と見え、大永三年の作ということになる。このようにして、宗珀(伯)は永正から大永にかけての活動が確認される。

次に宗春なる人物も「連歌総目録」にあたつてみると文明十七年十一月二十四日の何路百韻、大永三年九月二十一日の何路百韻(これは宗伯と同座)に出席している。元龜二年正月興行の「小原千句」に藤孝や紹巴とともに出席している

宗春は別人であろう。また文明十七年は大永三年からは四十年に近い昔であって、それも別人の疑いがある。鶴崎氏の年譜には大永六年六月四日の条に何路百韻の連衆として見えていて、結論としては大永年間に活動した人物である。

珠易は大永二年八月二十二日の玉何百韻、大永五年九月二十一日の何人百韻にそれぞれ宗長と同座している。このように宗伯、宗春、珠易の三名は、大永・大永期に生きた、宗長・宗碩あるいは肖柏らをとりにくく、群小の連歌師であったと見える。

なお奥書を見ると、「有」の字の用法が奇妙で、不思議な文体と言わざるをえないが、考えるべきは「得三人柴屋同道有」という部分であろう。「三人を得て柴屋に同道有り」とでも読むのであろうか、五人の連衆のうちの人間関係をどのように考えるかで、周桂が他の三人を引率して宗長のもとに至り、連歌を興行したと読めば、これは周桂の行文と見られようか。

以上二点の資料は大永・大永期の宗長の活動を伝えるものであり、句集「那智籠」「老耳」との関連、ならびに同座の連衆について考えてみた。

注 拙著「連歌史の諸相」のうち、「那智籠」に関する覚書」「老耳」に関する覚書

(文学部・文学研究科教授)